

島崎篤子先生のご退職にあたって

峯村 操

島崎篤子先生は、2007年に文教大学教育学部教授として着任されてから、14年間本学で教鞭を執られ、2021年3月に定年を迎えてご退職になられました。本稿では略儀ながら先生の功績や人柄をご紹介します。感謝の意を表したいと思います。

先生の専門領域は「創造的音楽学習の歴史的・実践的研究」で、日本音楽教育学会の重鎮として音楽教育の世界を牽引され、多くの著書・論文を発表してこられました。それらは学術的に高い価値を有するのみならず、現代の日本の音楽教育の礎となり、教育現場で活用されたり、学会発表でも頻繁に引用されたりしています。カナダの作曲家マリー・シューファーの提唱した「サウンド・スケープ」の概念をベースにした、既存の楽譜や楽器にとらわれない「創造的音楽学習 (Creative Music Making)」を日本に実践的に導入した1人であり、従前の「教師の模倣」に留まる日本の音楽教育を長年にわたって変革してきた1人でもあります。こうした功績は、島崎先生の妥協のない学究的な姿勢と共に、若い頃から改革の意志をもって教育現場で新しい実践を積み上げていたことが確固たる裏付けとなっていると思います。音楽専修生が1年次に履修する「教科教育法Ⅰ」では、学生が思い思いの「音の出るもの(音具)」を使って、賑やかに「創造的な音楽」を奏でていました。学生の楽し気な表情を見るたびに、「生きた音楽の授業がここから生まれ、次の世代に伝わるのだ」という思いがしていました。

また、島崎先生は日本及び世界の諸民族の音楽についても深く研究されており、1999年に上梓し、2013年、14年に改訂された「授業のための日本の音楽・世界の音楽」の世界の音楽編、日本の音楽編は、今や現場でのバイブル的な存在となっています。島崎先生の研究室には、博物館にでも行かなければ目にするのできないような世界各国の楽器が所狭しと並べられていました。本物に触れさせてこそ、学生・生徒たちに伝わるといふ、先生のお考えの証左と感じていました。

島崎先生は学生に対し厳しい一面もありましたが、学生を育てることへの強い信念と深い思いやりを持っておられました。担任されたクラスの学生で、深夜のアルバイトが続き、卒業が危うくなった者がおりました。その学生は、バイトを辞めることもできず授業への出席も不足、卒業試験・演奏会への出演も、卒業さえも諦める寸前でした。そんな事態の中、島崎先生と一緒にアルバイト先に行ってほしいと私に言ってきました。私は静止しかけたが、類稀なる行動力を持つ先生の勢いに押され、私たちは学生がバイトする焼き鳥屋に乗り込みました。そこで店長に直談判、「何としても彼女を卒業させたいのでバイトを辞めさせていただきたい」と言い切り、店長もその剣幕に押されて屈服したのでした。その後学生は練習に励み、卒業演奏会でも立派な演奏をしました。現在は教員として活躍しています。

他にもエピソードは山ほどあります。音楽専修の管理外のレッスン棟が酷く不潔になっている状況を改善するために、2・3年の音楽専修の学生と相談して、自ら学生と一緒に埃だらけになって大掃除を行い、その後、施設課と交渉してレッスン棟は定期的に掃除業者が入るようになりました。音楽棟のトイレや音楽研究室の整備にも取り組んで下さいました。

偉大な研究者でありながら、尊大な面は微塵もなく、気さくな先生でした。学生は陰で「篤ちゃん」などと親しすぎる呼び方をするので、私は何度も窘めたものです。

島崎先生はご自身、45年間の教員人生の中で、文教大学での14年間で最もやりがいがあり、心安らかに幸せに過ごすことが出来たと仰っていました。その感謝の気持ちとして最後に信じられないようなプ

プレゼントをしてくださいました。私たちがかねてから望みながらも果たせなかった、ドイツ製スタインウェイのグランドピアノ（B型）を大学に寄贈されたのです。学生にとって良い楽器で演奏することは音楽的感性を磨くうえでも、音楽への意欲を高めるうえでも、非常に大切に有意義なことです。13号館13101教室にあったピアノは、老朽化が進み、良い楽器の購入を大学側に是非にと望んでいたのですが、高価ゆえ叶わず、音楽研究室の教員誰しもが学生を不憫に思っていた矢先でした。新品でこそありませんが、2006年製の大変状態の良い楽器で、おまけに現在、世界で最高峰のピアニストでもあるウラディミール・アシュケナージのサインまで入った、大変貴重なものです。おいそれと手を出せる価格ではなく、まさに我々にとっては僥倖と言っても過言ではない、至高の贈り物でした。

「私、寝不足なんです」これが先生の口癖でした。実際、目の回るような多忙な毎日を過ごされていたようです。退職後は健康のためにも、せめて1日6時間はお休み頂きたいと望んでいます。

長い歳月で、島崎先生の薫陶を受けた学生・生徒は数え切れないと思います。最後に、先生が文教大学とそこに集う教員、学生を心から愛して下さったことに幸せを感じると共に、深い感謝を表したいと思います。島崎先生、有難うございました。そしてこれからも、お元気でお過ごしくださいますように。先生のいつものお別れの言葉で締めくくります。「ごきげんよう！」

(みねむら みさお 文教大学教育学部学校教育課程音楽専修)